



## 主張

# 忘れてはならないもの

山内 孔

「特別の教科 道徳」(以下道徳科という)は、中学校では令和元年度から全面实施され、今年度で七年となった。改正の背景には、道徳が他教科等に比べて、年間授業時数の確保ができていないことなどの課題が挙げられていた。令和三年度道徳教育実施状況調査では、「道徳教育に対する教師の意識」「授業時間数の十分な確保」の両項目について、小・中とも肯定的な回答が九割を超え、非常に高い割合で前向きな変化が認識されている。一方、過半数を超える学校が「議論して考えを深める」「多面的・多角的に考える」ための指導に課題を感じていることも明らかにになった。つまり、道徳科の指導については、授業時数の量的確保から「考え・議論する」道徳科への質的転換に課題が変化してきたといえる。

質的転換のための方策として、ICTの活用は、非常に重要で効果的な手段である。例えば、大型装置での映像の提示、アンケート調査の即時集計と結果提示、思考ツールを用いた考えの整理、アプリを用いた他者参照といった様々な活用が考えられる。さらに、個別最適な学びや適切な評価につなげることもできる。大切なことは、これらの機能を教員の明確な指導の意図に基づいて活用し、生徒の学びの質を高めていくことである。目的と手段を混同せず、道徳科の特質を生かした授業を積み重ねていくことで、更なる指導の充実が図られるものと考ええる。



ところで、道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであることから、学校の管理者である我々校長は、育てようとする生徒の姿を明らかにするとともに、生徒や地域の実態と課題、教員や保護者の願いを踏まえた全体計画を作成する必要がある。この計画の下、道徳教育推進教師を中心として、全教員が協力して、道徳教育を展開することが重要である。教員一人一人の道徳科の指導力を向上させるためにも、チーム学校としての組織的な取組は欠かせない。また、この計画には、学校の特色を生かした指導を位置付けることも効果的である。例えば、管理職や教職員が自分の専門とする教科など、得意分野を生かした指導をしたり、複数の教員で学年全体の指導をしたりする方法が考えられる。いずれの場合においても、ねらいを明確にして計画的に取り組み、充実した道徳科の授業実践が求められる。

しかし、中学生ともなれば、道徳的価値が大切であることを理解しており、授業においてもその価値を表層的に尊重する態度を示すこともある。このような場合、実感を伴って道徳的価値のよさや大切さを理解させる工夫がなければ、生徒自らが道徳性を養っていくことは難しい。ここで忘れてはならないのは、人間としてのよりよい生き方について、教員と生徒が共に考え、共に追求するという姿勢を大切にすることだ。そして、生徒と生徒、生徒と教員が語り合い、これまでの生活を振り返り、自己を深く見つめる、実感を伴う授業を繰り返し実践していくことが、道徳科においては最も重要なことであると考える。

(前全日中副会長・松山市立東中学校長)